

Paul L. Swanson:

Foundations of T'ien-T'ai Philosophy

—The Flowering of the Two
Truths Theory in Chinese Buddhism—

山 野 俊 郎

天台智顗(五三八―五九七)の教学の中心的な観念の一つである三諦説の成立を論じ、また三諦という観点から彼の哲学や仏法理解の基本構造を説明しようとする本書は、著者ポール・スワンソン (Paul Swanson) 博士がアメリカのウィスコンシン大学に提出した博士論文をベースとしてまとめられたものである。本書はウィスコンシン大学とは過去十数年来、真宗学、仏教学をはじめとする學術提携の公的な関係結び、交流を重ねてきた。ウィスコンシン大学からは既にいく人かの若い研究者たちが研修員として本学に迎えられ、本学で学んできている著者もその一人である。ウィスコンシン大学の博士課程を終えた後、一九八三年から三年間にわたり本学で博士論文の作成に取り組んできた。本書はこのような両大学の交流がもたらした成果の一つであるといえよう。著者は現在、南山大学の助教授の職にある。また南山宗教文化研究所の所員であり、“Japanese Journal of Religious Studies” 誌のエディターとして活躍している。評者は本学において、この若いアメリカの天台

学研究者と共に学ぶ機会を持つことができた者であり、ある輪読会で共に『摩訶止観』を読んだ頃が懐しく思い出される。

これまでに欧米の研究者によって著された天台智顗の教学に関する研究書として、まずレオン・ハーヴィン (Leon Hurvitz) 博士の労作 “*Chih-i (538-597): An Introduction to the Life and Ideas of a Chinese Buddhist Monk*” (1962) を挙げるべきとができる。三十年近くも前に出版されたこの書物は智顗教学をもっぱら、いわゆる五時八教のシステムに従って論ずるものであった。また近年、チャペル (D. W. Chappell) 教授を中心とするハワイの研究者たちによって『天台四教儀』の英訳本である “*T'ien-T'ai Buddhism: An Outline of the Fourfold Teachings*” (1983) が出版されたが、これもまた天台教判(五時八教)に関する著作である。このようにこれまで欧米においては、智顗もしくは天台の思想が五時八教の教判説にもとづいて語られることが多かったようである。この傾向に対して著者は、天台の五時八教の教判は現代にあっては単に学問的な、あるいは歴史的な関心を引くものでしかなく、いく分硬直した時代遅れの過去の遺物といった印象を与えるものであることを指摘する。一方、三諦の教説こそが天台仏教に生氣を甦らせるものであり、それによって現代に生きる我われはより容易に天台仏教にアプローチすることができるのであると述べ、それが「天台仏教への鍵」であるとする (Preface)。このような観点から著者は智顗の三諦説に注目し、本書においてまず智顗以前の二諦説解釈の展開を論じ、それに基づき彼の三諦説の本質に

迫ろうとするのである。

さて、本書において論証しようとした命題として、著者は五項目を挙げている(十六―十七頁)。すなわち、次のとおりである。

- (1) 智顗は『中論』第二十四章の第十八偈(「衆因縁生法、我説即是空、亦為是仮名、亦是中道義」)を三諦と関連させて解釈したが、これは龍樹の著作や中観哲学の原意を誤解したものでなければ、またそれから逸脱した解釈でもない。そのような解釈は中観哲学の、とくにその二諦説の論旨をよく展開させるための有効な工夫であった、ということ。

- (2) 中国固有の哲学に由来する「有」と「無」という曖昧で誤解されやすい用語を導入することによって、中国における二諦論議は収拾がつかなくなっていく。智顗の三諦説はそのような二諦論議のコンテキストの中で成立したものであり、彼は空、仮、中の三種の概念を活用することによって、この有無の二元論を克服したのである、ということ。

- (3) 存在論(ontology)への中観仏教的なアプローチを言葉で表現することは可能であり、智顗の三諦説はその最も良い例である。しばしば「中国の中観派」(Chinese Madhyamika)と称される三論宗の伝統と同様に、天台哲学は中観仏教の伝統を継承し発展させたものであると言いうる、ということ。

- (4) 三諦の概念こそ智顗の思想と実践の構造を明確に示すも

のである。西洋において、また日本においてさえも、これまで天台仏教は通常いわゆる五時八教の教判システムによって理解され説明されてきたのであるが、三諦説は天台仏教の内容をそれよりもよりいっそう正確に表現するものである、ということ。

- (5) 存在の真実相とは何か、又それを理解し、完全な悟りを達成するためには何が為されねばならないのかという問いに対する智顗の答えが三諦説であり、そしてそれから派生する教義や仏道実践であった、ということ。

次に、本書の全体の構成・内容を知るために目次を示せば、おおよそ次のとおりである。

- 第一章 Truth in T'ien-T'ai (天台) Philosophy
- 第二章 Early Madhyamika (中観学派) in China
- 第三章 Early Chinese Apocryphal Sūtras (疑經)
- 第四章 The Liang (梁) Period (502-557)
- 第五章 Hui-Yuan (淨影寺慧遠) 's Encyclopedia of Mahāyāna Buddhism

第六章 The Cheng Shih Lun 『成実論』 Scholars

第七章 The Sanlun (三論宗) Critiques

第八章 Chih-i (智顗) 's Threefold Truth

これに続いて本書の後半には、智顗の『法華玄義』巻一下～二下(T 33, 691a-705b)の英訳が載せられている。

このうち第一章においては、智顗の三諦説の成立の事情が、中観学派(Madhyamika)の二諦説の展開として略述されてお

り、また三諦説が智顗の諸教説を貫通するものであることが論じられている。この章は本書の序 (Introduction) であると同時に、本書全体の要約 (summary) でもある。

紙面の都合上、各章の詳しい紹介や論評は割愛し、次に、『法華玄義』(巻二下～二下) の英訳について見てみよう。訳文は全般に概ね適切であり、また読みやすく訳出されており、著者の工夫のあとがしのばれる。また、詳細な訳註は研究者にとって有益である。ここではとくに前半の部分(本書一五九～一九九頁、T33, 691a-686b) の英訳について、気づいた問題点をいくつか取り上げ論じてみたい。ただし、以下、取り上げた英語の文章あるいは語句の次の() 内は、所訳の『法華玄義』の原文及び大正藏經における其の所在を示すものである。問題があると思われる箇所傍線を付した場合もある。

○ p. 159, l. 5: Introduction (by Kuan-t'ing) 681a-c

原文の英訳の部分の前に『法華玄義』全体の目次 (Comprehensive Outline of Contents) が載せられているが、これはその目次の中の記述である。『法華玄義』の冒頭部分 (T 33, 681a-c) では、灌頂 (Kuan-t'ing) による「私記縁起」に続いて「序王」、「私序王」、そして「譚玄本序」と呼ばれる三種の序文が置かれている。このうち灌頂が書いたのは「私序王」のみであり、他の二つの序文は智顗自身のものである。著者は序文の部分をすべて灌頂のものとして見なしているようだが、それは誤りである。

○ p. 164, l. 3-4: Second, the distinct [characteristics

of the Lotus Sūtra] are interpreted in five sections (「別解五章」T 33, 691a)

ここに云う「別解五章」(「別して五章を解す」とは、訳文のように、他の諸經とは異った『法華經』独自の特質 (distinct characteristics) を五項目にわたって解釈するというような意味ではない。厳密には、五章(『五重玄義』『法華經』の名・体・宗・用・教の五)について、その一一をとりあげ各別に解釈していくという意味である。また、「別解」に対する「通解」(『七番共解』という語句に関して著者は註記(註1 p. 282) の中「The first section was on the shared characteristics of all sūtras」と解説しているが、これは正しくない。ここに云う「通解」(あるいは「共解」とは、諸經 (all sūtras) に共通する性質を解釈するというような意味ではなく、七番(標章・引証・生起等の七項目)の各々において『法華經』一經の五重玄義を共通して解釈するということである。『法華玄義』巻第一上に「通[解]は則ち七番の共解、別[解]は則ち五重の各説なり。……衆經の通別は今論ぜざるところなり。一經(『法華經』)の通別を今まさに弁すべし」(T 33, 682a)と述べられるように、「通解」とは諸經についての通解ではなく、『法華經』一經についてのものである。

○ p. 164, l. 9-10: Transcendence of the Old [interpretations] (「出」T 33, 691a)

「出」云々「出」とは勝る、卓越するとうような意味で

はなく、単に例出する、提出するということである。旧来の諸解釈を例として出だす(「出旧解」という意味である)。

- p. 166, l. 34~35: the body one faces is the perfect and eternal body (「向身是円常之身」 T 33, 691b)

この「向」は向かい合う、直面するとういう意味ではなく、昔、過去の意であり、通常「ちや」と読まれる(「向身」「ちやの身」。つまり、この文章は、藏教において示される仏身(「向身」)がそのままだ円教の円常の仏身であることを説くのである)。

- p. 168, l. 5~6: Their intension is the same [as mine], but their words are weak (「此意同而辞弱」 T 33, 691b)

これは慧観、慧基、及び北地師の三者の「妙」解釈に対する智顓自身の批評である。「意同」とは三師の解釈が同一であるということであり、訳文の「とく」、「彼らの解釈(趣旨)」は私(「私」とは智顓を指すのか?—評者)のそれと同じである」という意味ではなう。

- p. 169, l. 8~11: [their interpretation of Śākyamuni's eighty-year life span [includes only] the long eon previous [to his life as Śākyamuni], and his next life is considered to be no longer than above eon (「八十年寿、前不過恒沙、後不倍上数」 T 33, 691c)

これは「昔」教に説かれる仏の八十年の寿命と、「今」経(『法華経』)に説かれる仏の久遠の寿命とを対比して論じたものである。訳文では「恒沙」や「倍数」が訳出されてお

らず、「前は恒沙を過ぎず」、「後は上の数を倍せず」の訳も正確である。ところがこの文章の少し後に出てくる同様の文(「前過恒沙、後倍上数」 T 33, 692a)を著者は『法華経』の経文をハーヴェン博士による其の英訳“Scripture of the Lotus Blossom of the Fine Dharma (The Lotus Sutra)” (1976, p. 239)を踏まえて「[The Buddha's life] previously exceeded [in length of years the number of] the sands of the Ganges River, and his next life is twice the above number (p. 170, l. 35~37)の如く、より適切に訳出している。

- p. 170, l. 8~9: Fa-yün's interpretation of *miao* is much more advanced (「光宅釈妙、寧得遠乎」 T 33, 691c)
- 訳文とは逆に、原文の文意は、光宅寺法雲 (Fa-yün) の「妙」(*miao*)の解釈がとくに優れたものではなく浅近であることを言おうとしたものである。

- p. 170, l. 10: the rest will be swept away by the blast (「余者望風」 T 33, 691c)

中国では古来、占星術や望気術とともに占風術(風占)が盛んに行われたことが知られている。^{*}風は単なる自然現象ではなく、天と地の間に充滿し流動する気のあらわれであると信じられていた。占風術はたとえば軍事において重視され、風を観察する(「望風」)ことによって戦況や軍兵の進退が占われた。順風をうけて進攻する軍兵は勝利をおさめ、一方、逆風にある者たちは敗軍となると考えられた。いま上の文章

に対する湛然の注釈を見ると、「順風に陣を破するに陣の首

すでに破すれば、余は風を望むがごとし」『法華玄義釈籤』

卷三 (T33, 836c) と解説されている。湛然のこの注釈を参照

すれば、「余は風を望まん」という句の意味は次のように考

えることができよう。すなわち、慧観、慧基、北地師及び法

雲の四師のうち、「妙」釈において最も深い理解を示してい

る法雲（『陣首』）をまず論破すれば、ちょうど陣首を破ら

れた軍の將兵が風氣を望見して風勢を知り、おのずと自軍の

敗北を悟って敗走し去るように、智顗の論難の勢いを見て余

の三師は、おのずと自らの解釈の非なることを知るに至るで

あろう、と。「余の者たちは一陣の風によって吹き飛ばされ

るであろう」という著者の訳文は誤りであると思われる。

* たとえば、坂出祥伸「風の觀念と風占——中国古代

の擬似科学——」（新田大作編『中国思想研究論集』所

収、雄山閣出版、昭六十一）を参照されたい。

○ p. 170, l. 30～: ここに挿入されるべき訳文（原文は「那忽

言法華明一乘是了、不明仏性は不了」T 33, 691c～692a）が

欠落している。

○ p. 172, l. 3～: ここに挿入されるべき訳文（原文は「淨名云、

雖成仏道転法輪而行菩薩道、又云諸仏秘藏無不得入、則見理

不下」T 33, 692a）が欠落している。

○ p. 175, l. 20～21: The present [interpretation of the

Lotus Sūtra by Fa-yün] is criticized as crude (『今難其

僞』T 33, 692b)

「今はその僞を難す」とは、訳文のように「法雲によるそ

のような法華経解釈が僞であると批判される」などという意

味ではない。法雲は昔教は僞であり、今教は妙であると解釈

したが、このうち「昔教は僞である」とする彼の見解をとり

あげて論難するというのが、この「今はその僞を難す」とい

う文の意味である。

○ p. 187, l. 34～p. 188, l. 12: [According to Hinayāna

teachings, there is no retribution for śrāvaka and pra-

tyekabuddhas, for three reasons.] First since śrāvakas

and pratyekabuddhas are without further birth, they

have no retribution. The reason is that when the [un-

derstanding of the] real is aroused, this is the [ultimate]

result and there is no need to discuss any further re-

tributions. Second if undefined dharma arises as the

retribution for repetitive causes, then repetitive result

will be attained. Since the lack of further birth from

having no defilements [a characteristic of arhats] is

not a condition wherein one is shackled by further

birth, there is no later retribution. Third... (『一乘既不生、

是故無報、何故發真是果、而不論報、無漏法起』酬於習

因、得是習果、無漏損生、非牽生法、故無後報』T 33, 694c)

この部分の訳は全体にわたって混乱しているように思われ

る。この『一乘に報果（後報）がなごころごとく三つの理

由が述べられているとするのは正しくなる。「何故發真是果

而不論報」(「何が故ぞ真を発するは是れ果にして而も報を論ぜざる」)の文は、二乗は無漏の法を発して習果(四果)を得るのに、何故にそれにも関わらず彼らには報果(後生)がないとされるのかという意味であり、ここでは二乗不生(無報)の理由を質問しているのである。ところが訳文(「The reason is that...」)では、この文が二乗不生の理由を述べたものと見なされ、そのように訳出されている。また、「Second if defiled dharma... there is no retribution」(無漏法発…故無後報)の部分は、第二の理由を述べたものではなく、まさしく上の質問に対する解答として提示されたものである。

O p. 198, l. 10~12: various sentient beings, aggregates, and various "lands" 国土 such as tentative and real "lands" from hell to that of the Buddha (種種衆生、種種五陰、種種国土、所謂地獄仮実国土乃至仏界仮実国土) (T 33, 696a)

右の傍線部分を著者は「仮(の国土)」と実の国土」と読み、そのように訳している。一方、湛然はこの句に対して「仮は即ち衆生、実は即ち五陰、および国土、即ち三世間なり」(『法華玄義釈義』巻第四(T 33, 844a-b)と注釈している。)

まり「仮実国土」とは五陰世間(「実」、衆生世間(「仮」)及び国土世間の三種世間のことであるとされる。また、『摩訶止観』巻五上の「観陰入界境」において智顗は三種世間を解説しているが、そこで衆生世間と五陰世間との関係について、「衆生世間は既にこれ仮名にして体なし。分別して実法(五陰法)を攬って仮に施設するのみ」(T 46, 53c)と説明されている。このような点から、ここに云う「仮実国土」という表現は「仮の国土と実の国土」の意ではなく、単に衆生世間・五陰世間・国土世間の三種世間を言い替えたものであると評者は考えている。

以上、本書を概説し、また翻訳上の問題点をいくつか取あげ卑見を述べた。天台教学において最も重要な概念の一つである三諦説の成立を広い視野のもとに論じていく本書が出版されたことは、とくに欧米における中国仏教あるいは天台仏教の研究者を裨益するところが誠に大きいと思われる。また難解な『法華玄義』の原文にとりくみ、それをきわめて適切に訳出している著者の努力に敬意を表するものである。博士の今後の研究成果を期待したい。

(Berkeley: Asian Humanities Press, 1989, 15×22.5 cm
xii+399 pages)